

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K01897

研究課題名（和文）保育における「おもしろさ」の生成過程に関する現象学的研究：園文化の視点から

研究課題名（英文）A phenomenological study on the generative process of "interestingness" in preschool education: From the perspective of preschool culture

研究代表者

東村 知子 (Higashimura, Tomoko)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30432587

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、二つの協力園における保育観察およびインタビューに基づき、保育におけるおもしろさを生み出す鍵として、多様性、偶然性、伝播性の三つの概念を見出した。多様な子どもたちが在籍する中で、保育者は子ども同士、子どもと環境の関係を丁寧に結び合わせながら集団の遊びを生み出していた。このようにして紡がれたネットワークによって子どもたちが支えられ、他にはないたった一つの保育のあり方が作られていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日の保育現場では、丁寧な関わりを必要とする子どもが複数いる中で、個の育ちを保障しながらクラス集団をつくっていくことが求められている。本研究では、子どもと周囲の環境との関係を丁寧に紡いでいく保育者の関わりと、そうして紡がれたネットワークによって子どもたちが支えられていくプロセスを、具体的な事例を通して明らかにすることで、保育という営みの多面性と本質の一端を示し、保育を見る新たな視点を提供した。

研究成果の概要（英文）：Based on observations and interviews at two preschools, this study found three concepts as keys to the generative process of "interestingness" in preschool education: diversity, chance, and propagation. In a diverse enrollment of children, teachers created group play by carefully linking children's relationships with each other and with their environment. It was revealed that the network spun in this way supports the children, creating a unique way of education.

研究分野：子ども学

キーワード：保育 遊び おもしろさ 園文化 価値 関係 多様性

1. 研究開始当初の背景

乳幼児期の保育・幼児教育(以下、保育)への関心が高まりを見せる中、一般には待機児童解消を中心とする保育の「量」に焦点があてられがちであるのに対し、保育や子どもの発達を専門とする立場からは、保育の「質」の議論を深める必要性が指摘されていた(秋田・箕輪・高櫻, 2007)。保育の質に関する研究はすでに積み重ねられていたものの、日本特有の保育の質をどのようにとらえるかという問題や、幼児期の主たる活動である遊びを十分にとらえることができていない可能性、各園で行われている個性的な取り組みや新しい実践を適切に評価できないおそれなどの課題が残されているという指摘もあり、「質的事例研究」の必要性が論じられていた(秋田・佐川, 2011)。そこで、保育における子どもの中心的活動である遊びと、保育者が行う保育実践とを、ともに「園文化」という視点から検討することを着想し、遊びと保育の本質をなすと考えられる「おもしろさ」に焦点をあてて研究を行うことにした。

2. 研究の目的

本研究は、「保育におけるおもしろさは実践の中でいかに生み出されるか」を、「園文化」という視点から明らかにすることを目的とした。ここでの「おもしろさ」とは、子どもにとっての遊びのおもしろさと保育者にとっての保育のおもしろさの両面から構成される。園文化の異なる複数の園においてエスノグラフィックな参与観察とインタビューを行い、おもしろさが生成されるプロセスにアプローチする。この作業を通じて、上記の二つのおもしろさの関連性、おもしろさと園文化との相互関係を解明することにより、「保育の質」および「保育者の資質向上」に関する議論に新たな視点を提供し、保育のボトムアップを達成することを目指した。

子どもの遊びが遊びそれ自体を目的とする行為・活動である以上、子どもも保育者も何らかのかたちでおもしろさを感じ取り、追求しているといえるだろう。「おもしろさ」は保育実践の多面的なありようを見る手がかりとして極めて有効であると考えられる。このように定義が難しい現象を捉えるため、本研究では、あらかじめおもしろさとは何かを定義したうえでそれを抽出するのではなく、活動や実践が参加者によっていかに形作られているかというプロセスに焦点をあてる現象学的方法を参照し、その場の参加者によっておもしろさがいかに生み出され共有されているかを丁寧に記述・分析する。園において遊びと保育のおもしろさが生み出されるプロセスやおもしろさの捉え方に違いはあるか、そうした違いがどのような園文化によって生み出され、あるいはいかにしてその園の文化を形成しているかを検討することで、一つのものさしで測ることのできない保育という営みの多面性ととも、その本質を明らかにできると考えた。

3. 研究の方法

2.で述べた目的に基づき、2つの協力園(A園・B園)においてフィールドワークを行った。A園は私立の認可保育園(0～5歳児)、B園は国公立の幼稚園(2年または3年保育)であり、ともに子どもの姿の丁寧な見取りと子どもの自発的な遊びを重視した保育が行われていた。フィールドワークは、保育場面の参与観察と保育者へのインタビュー(研究者との事後協議における保育者の発言を含む)からなるが、園内で行われた研修や研究会にも参加した。保育場面の参与観察は、ビデオカメラおよびデジタルカメラを使用し、終了後にメモをもとにフィールドノートに記録した。インタビューおよび事後協議は許可を得て録音し、逐語録を作成した。

収集したデータから、保育におけるおもしろさが特にあらわれていると感じられた保育場面や保育者の語りの事例について分析を行った。分析対象の事例抽出にあたっては、1)子ども同士、子どもとモノ、子どもと遊びの関係がどのように生まれ、変化していくか、また保育者はそのプロセスにどのように関わっているのか、2)個別的な支援を必要とする子どもが複数いるクラスにおいて、保育者は個と集団をどうつないでいるか、という二つの視点を軸とした。各事例の具体的な分析の視点については、それぞれの事例からボトムアップで生成した。

なお、当初の研究計画では、方法として多声的ビジュアル・エスノグラフィー(Tobin, et al, 2009)を採用する予定であったが、個人情報保護の問題、保育を断片的に切り取り編集した映像を提示することで保育者や園に対する誤解が生まれる危険性等を考慮し、対話的ビジュアルエスノグラフィー(古賀, 2019)に準じた方法に変更して行うことにした。

4. 研究成果

ここではまず、3.の方法により分析を行った具体的な研究結果(研究1～4)について概略を記述し、それらを通して得られた全体的な成果について述べる。

(1)保育実践の事例分析から得られた成果

【研究1】「魔女のほうき」が生み出す行為と相互行為の可能性(A園)

A園である日に観察された「魔女のほうき」を作りそれを使って遊ぶという活動に着目し、この活動の展開過程を「アーティファクト」(石黒, 2001)とその「アフォーダンス」(ギブソン, 1985)という観点から論じた。アーティファクトとは、人間の活動を組織し、人と人とを対話さ

せる機能をもつ媒体である。本研究では、子どもたちが保育者と制作した「魔女のほうき」をアーティファクトとして捉え、それが活動の中でどのような機能を果たしていたかを、以下の二つの観点から明らかにした。第一に、人間の活動を組織する媒体としての側面を、アフォーダンスという視点から検討した。アフォーダンスとは、環境に存在する事物がもつ「価値」や「意味」のことである。ここでは、素材の筒（直径約4cm、長さ約60～80cmの段ボール製）と「魔女のほうき」（筒の一方の先端にカラフルなスズランテープをセロハンテープで貼り付けたもの）がもつアフォーダンスを、実際に子どもたちがそれを使ってどのような行為をしたかという点から明らかにした。第二に、人と人とを対話させる機能というアーティファクトのもう一つの側面について、観察された子ども同士の相互行為から検討した。特に、複数の子どもたちがほうき（筒）を使って同じ行為をする場面に着目し、子どもが同じ物を持つことによって同じ行為が生まれる微視発生的なプロセスを明らかにすることで、アーティファクトの多様な意味を子どもたちが共有し共に生成していく様相を描き出すことを目的とした。

フィールドノートおよび録画データから、ほうき（筒）に関わる子どもたちの行為のレパートリーを抽出したところ、ほうきの制作前（素材の筒の段階）で11種類、ほうきの制作後に新たに生じたものは16種類で、合計27種類であった。筆者が観察したかぎりでは、27種類の行為のうち、保育者から子どもに提示したものは3種類のみであり、他はすべて子どもたちが始めたものであった。また、一人の子どもにしか見られなかったものは2種類のみであり、それ以外の行為はすべて複数の子どもに広がり、繰り返されていた。

ほうきを媒介とする子ども同士の相互行為について、複数の子どもが同じ行為をする5つの事例を取り上げ、ある子どもから生まれた行為がさまざまな形で他の子どもたちに伝わっていく過程とそのバリエーションを検討した。物に関わる行為とそれが生み出すイメージ、そのイメージを表現する言葉が子どもたちの間で行き交う中で、新たな行為やイメージが生み出され、遊びのできごとが発展していくというプロセスが見出された。子どもたちの行為と相互行為の多様性を検討することで、保育実践における遊びのおもしろさをもつ多面的なありようの一端を描き出した。

【研究2】「たこ焼き屋さん」の事例にみる遊びの生成・展開過程（B園）

ある日の保育で観察された「たこ焼き屋さん」の遊びの事例に着目し、遊びの種が生まれ、クラスの遊びに発展していくプロセスをエスノグラフィとして記述した。

この日は、さまざまな遊びが同時進行し、子どもたちはそれぞれに保育者を求めてきていた。保育者は1日の保育を振り返り、「環境も作っていききたいけど、人と人ともつなぎたいし、個人をちゃんと保障したいって、すごい盛りだくさんやったなと思ったから、なんかすごい難しいなあって。で、どの子のスピードにも応じていきたいと思うと、やっぱり（自分の）分身がいるなと思ったんですね」と述べていた。すべての子どもや求められていることに応じられないというジレンマを抱えながらも、保育者は、子ども同士をつなぎ、必要な環境を用意して子どもとモノをつなぎ、いわばハブのような役割を果たしている。また、そうした援助の背景には、一人ひとりの子どもに対する深い理解に根ざした直感のようなものがはたらいている。例えば、遊びの中心となった二人の幼児はこれまであまり接点がなかったが、この二人ならうまくいくのではないかと考えて屋台作りは二人に任せたと保育者は語っていた。一方、保育者だけでなく、遊びそれ自体や、遊びに使われたモノ、子どもたちが作ったモノも、子ども同士をつなぐ役割を果たしていた。一人の幼児の行為がきっかけとなってたこ焼きの遊びが始まったとき、それまで周辺にはいたがほとんど関わりを持たなかった子どもたちが、すぐにその遊びに惹きつけられていた。また、たこ焼き屋の屋台というモノが残ることで、その日はこの遊びに参加していなかった子どもたちが後で加わり、遊びがさらに発展していった。このように、保育者の丁寧な関わりが生み出した人、モノ、遊びのネットワークが、保育のおもしろさを考える上で重要な鍵となることが示唆された。

【研究3】保育実践における価値調整と価値判断の実際（B園）

保育行為は何らかの「価値」に媒介された行為であり、保育行為に伴う「価値判断」は、一人一人の子どもや一つ一つの場面に応じて精妙に調整しながらなされている（戸田，1999）。また、価値はそれ自体、関係の中で作られ、維持され、作り替えられていくものである（ガーゲン，2020）。本研究では、保育者が語った5歳児クラスの子どものトラブルのエピソード（二人の幼児が1着のドレスを次の日にどちらが着るかをめぐり、激しいケンカをした）について、価値という視点から検討を行い、実践の中での価値調整と価値判断がいかに行われているかを明らかにした。

保育者の語りから保育行為を抽出し、その背後にどのような価値があるかを検討した結果、子どもたちの力で解決する、どちらの気持ちも理解する、安易な解決にはしない、自分の思いを相手にぶつける、相手の思いに気づく、教師の解決を押し付けない、お互いを思い始めていることに気づかせる、自分の思いを出せるなど、さまざまな価値があることが明らかになった。その他に、5歳児のこの時期にはこれくらい育ってほしい、子どもたちを時間通りに保護者の元に

帰す、いやな気持ちを週末まで引きずらせたくない、嘘はつかない、などの価値もあった。

保育における価値は複雑に絡み合い、時に矛盾する。必ずしも両立不可能ではないが、どの価値も実現しない可能性もある。価値の問題に直面する際、保育者は困難や葛藤を感じることも多いが、そうした葛藤を通じて価値が作り替えられたり新たに生まれたりする可能性もある。一方、子どもたちも日々の経験を通して多様な価値に触れているが、公平性、同情、正義感、正しさなどの価値はしだいに揺るぎないものになっていく。子どもの中で固定しつつある価値にゆさぶちをかけ、新たな価値を創り出そうとする保育者の関わりが見出された。

以上より、ある価値を大事にすることで、ある価値が損なわれてしまうように思われることがあること、相矛盾する多様な価値の中で瞬時に選びとっていくことが、保育におけるむずかしさでありおもしろさでもある可能性を指摘した。保育者の役割は、絶対的な「よさ」をもとに価値の裁定をすることではなく、その時々「よさ」を子どもと共に作り出していくこと、子どもたちをさまざまな価値に出会わせることである。そして、研究者自身がこの事例に感じたおもしろさの要因は、自身の価値を揺るがされ、広げられる経験にあったのではないかと考察した。

【研究4】病気の子どものインクルーシブ保育の試み（B園）

幼稚園在園中に股関節疾患の診断を受け、運動制限が必要になった幼児1名に対し、園で取り組んできた保育および保護者支援の経緯をまとめ、インクルーシブ保育の試みの実際と課題を明らかにすることを試みた。約8ヶ月間の経緯について、病気の判明からウェブ会議システムを利用した交流の実施まで、保護者の付き添いによる部分登園の期間、支援員を活用した登園の期間の3期に分けて整理した。その結果、病気の子どもの保育における課題には、先行研究で指摘されていた物理的な環境へのアクセスの問題や、全体に合わせることで生じる困難、友達とのやりとりの難しさのほかに、実際はできることを我慢しなければならないという困難が大きな影響を及ぼしていることを見出した。多様な子どもたちがいる中で保育のおもしろさを生み出していくことの難しさの一端を明らかにした。

(2)全体を通して得られた成果のまとめ

(1)で述べた4つの研究を総合して考察を行った結果、保育におけるおもしろさを生み出す鍵として、多様性、偶然性、伝播性の3つの概念が見出された。A園・B園ともに、興味や関係の結び方が大きく異なる子どもたちが共に参加するインクルーシブな保育環境において、保育者は、今いるメンバー、今ある環境およびモノの間関係を丁寧につなぎ合わせながら、集団の遊びを生み出していた。そのプロセスには、思いもよらないものがつながるといった偶然性や、子ども同士が模倣しあったり声を合わせたりすることによる伝播性もはたらいている。子どもがしたことや考えたことが複雑に絡み合う中で、他にはないたった一つの保育のあり方が作られていること、その積み重ねが、それぞれの園の文化の生成につながっている可能性を見出した。

保育者の丁寧な関わりを必要とする子どもが複数いる中で、個の育ちを保障しながらクラス集団をつくり、おもしろい遊びを生み出していく5歳児クラスの保育は、研究者の視点から見ると、項がいくつもある連立方程式を解くように困難なことであるように思われた。しかし、保育者と子どもの開かれたYOU(WE)世界(佐伯,2001)において、保育者は「みんな楽しく、誰も排除することなく、みんなが参加できるようにするにはどうすればよいか」を常に考えながら、人と人、人とモノの間関係を丁寧に紡いでいた。そのようにして生み出された関係のネットワークによって子ども一人ひとりが支えられ、5歳児の終わりごろになると、そのネットワークは保育者が驚くほどしっかりとしたものになっていた。保育におけるおもしろさは集団だからこそ生まれるものであり、だからこそ、困難であっても多様な子どもたちと共に保育するインクルーシブな環境が重要であることが再確認された。

園文化という観点では、二つの協力園に共通性と違いが見られた。いずれも長い歴史を持つ園であり、これまでずっと大事にされてきた価値を尊重しながらも、現在の社会状況をふまえて子どもたちに必要な保育を考え、文化を刷新していこうとしていた。園で大事にされてきたことや直面する具体的な課題はそれぞれ異なっていたが、その姿勢は共通であった。またどちらの園にも他のクラスの担任や他職種との連携などの課題はあったが、保育後や休憩中の職員同士の子どもについてのちょっとした会話や、全職員で行われる研修や事例検討でのコミュニケーションによって、園全体のネットワークがつくられ、それによって保育者の実践が支えられていた。研究開始当初は園による違いに焦点をあてていたが、今回の2つの協力園に関しては、差異よりも共通性の方が浮かび上がる結果となった。

引用文献

秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子、保育の質研究の展望と課題、東京大学大学院教育学研究科紀要、2007、47、289-305

秋田喜代美・佐川早季子、保育の質に関する縦断研究の展望、東京大学大学院教育学研究科紀要、2011、51、217-234

Tobin, J., Hsueh, Y., and Karasawa, M., *Preschool in Three Cultures Revisited: China, Japan, and the United States*, 2009, The University of Chicago Press

古賀松香、対話的ビジュアルエスノグラフィーへの模索：暗黙的な保育者の専門性を描くことは可能か、アジアの質的心理学（伊藤哲司・呉宣児・沖潮満里子編）、ナカニシヤ出版、24-33

石黒広昭、アーティファクトと活動システム、実践のエスノグラフィ（茂呂雄二編著）、金子書房、2001、59-95

J・ギブソン、生態学的視覚論：ヒトの知覚世界を探る（古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳）、1985、サイエンス社

戸田雅美、保育行為の判断の根拠としての「価値」の検討、保育学研究、1999、37-55

K・J・ガーゲン、関係からはじまる：社会構成主義がひらく人間観（鮫島輝美・東村知子訳）、2020、ナカニシヤ出版

佐伯胖、幼児教育へのいざない：成熟した保育者になるために、2001、東京大学出版会

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 東村 知子, 北山 千嘉子	4. 巻 4
2. 論文標題 幼稚園における病気の子どものインクルーシブ保育の試み 股関節疾患により運動制限を必要とする幼児への関わりから見えてきたこと	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 121-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 東村 知子	4. 巻 34
2. 論文標題 アーティファクトとしての子どもの制作物が生み出す行為と相互行為の可能性：「魔女のほうき」の保育活動から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 発達・療育研究	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Tomoko Higashimura, Terumi Sameshima, Tokujiro Ninomiya, Matsuka Koga
2. 発表標題 How to Integrate Support for the Individual and Learning in the Group
3. 学会等名 Education as Relating: A Virtual Conference (The Taos Institute) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 東村 知子
2. 発表標題 保育実践における価値調整と価値判断の実際
3. 学会等名 日本質的心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tomoko Higashimura
2. 発表標題 "Learning through Play" in Japanese Preschool Education
3. 学会等名 International Learning Festival (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鮫島 輝美, 東村 知子, 河合 直樹
2. 発表標題 社会構成主義/グループ・ダイナミックスにおけるアクションリサーチ 医療・教育・復興支援の実践から
3. 学会等名 2020 年度組織学会 60 周年記念年次大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoko Hashimoto-Higashimura
2. 発表標題 Preschool children's pieces of art as "artifacts" which enabled varieties of children's actions and interactions: A case study of "witch's broom" activity
3. 学会等名 The Taos Institute Silver Jubilee (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 東村 知子
2. 発表標題 「園文化」の視点から保育を見る試み：ある保育園でのフィールドワークから
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 能智 正博, 大橋 靖史, ヴィヴィアン・バー, 田中 彰吾, 田島 充土, サトウ タツヤ, 五十嵐 康博, 鈴木 聡志, 青野 篤子, 東村 知子, 国重 浩一, 熊倉 陽介, 金原 明子, 綾城 初穂, 沖潮 満里子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 328
3. 書名 ソーシャル・コンストラクショニズムと対人支援の心理学	

1. 著者名 ケネス・J・ガーゲン(著) 鮫島 輝美・東村 知子(訳)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 501
3. 書名 関係からはじまる 社会構成主義がひらく人間観	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------